

長詩『サーシカ』伏字復元の試み

中 村 喜 和

名誉をもとめず
楽しみのために
私は書いている。
世の人のほめ言葉
あげつらいなど
まっぴらご容赦。
笑いたい御仁には
高笑いしてほしい
私はそれで満足。
身持ちよからぬ輩
快く思わぬ向きは
ののしるもよし。
——『サーシカ』題辭

はじめに

アレクサンドル・ポレジャーエフが長詩『サーシカ』を書いたのは1825年のことである。作者はそのときモスクワ大学の聴講生で、やっと20歳を出たか出ないかという若さだった。作者の分身と思われる主人公の放埒な遊蕩生活を露骨に描いたこの作品は、内容が内容だけにその後長いあいだ印刷されることがなかったが、ノートに書き写されて手から手へと急速かつ広範囲にひろまった。

『サーシカ』は同じ名前の作者（アレクサンドルの愛称がサーシカである）に名声をもたらす代わりに生涯の災厄をひきおこしたが、同時代ばかりか後世の読者からは忘れ去られずに読みつがれ、印刷が許されるようになってからはポレジャーエフの作品集にかならず収録されている。彼の詩の本領は強いられた軍隊勤務の中での不幸な境遇や自由への熱烈なあこがれや専制への憎悪をうたった抒情詩にあるとはいえ、若書きの『サーシカ』の奔放もまたポレジャーエフの魅力ある一面を代表しているのである。

もっとも禁が解かれたとはいうものの、『サーシカ』が現代の読者にその全貌を示しているわけではない。最近刊行されたソビエトの諸版においてすら、かなりの語あるいは行全体が依然として点線で表わされている。日本流に言えば伏字である。個々の語の場合にはロシア語の若干の知識さえあれば隠された文字を推量することが容易であるが、数語から数行におよぶ伏字についてはそれも不可能である。たまたま筆者の手もとにある資料を利用して『サーシカ』の通行テキストの空白を埋めることが小稿のつましい目的である。

1

まず作者の生涯について簡単に述べておく。

詩人は1804年あるいは1805年にペンザ県に生まれた。父方の祖父ニコライ・ストルイスキイはウラジーミル県の知事だったことがあり、西方諸国の刑法体系に通暁してその賛美者でありながら邸内にロシア古来の拷問道具をそろえていた点で啓蒙君主エカテリーナ2世時代の典型的人物としてクリュチェフスキイの名著『ロシア史講義』にその名をとどめている⁽¹⁾。彼はまた詩人をもって自認し、当時のロシアの最高水準の技術をもつ印刷所をペンザの片田舎の領地内にもうけて自分の作品を印刷させた。クリュチェフスキイはストルイスキイの詩人としての無能ぶりを揶揄しているが、アレクサンドルの詩の天分は多少ともこの祖父に負っていると考えられる。

ニコライ・ストルイスキイに5人の息子と3人の娘があり、詩人の父レオンチイはその3男であった。レオンチイは1782年生まれ、そのころの貴族の子弟の多くがそうであったように幼くして近衛連隊に入隊したものの、長つづきせずに病気を理由に退役してウラジーミル県庁に勤務をはじめた。軍隊を退いて帰郷していた時期に地主屋敷づきの農奴の娘アグラフェーナと通じて生ませたのが後の詩人である。

アグラフェーナの妊娠を知ったレオンチイの母は、彼女を農奴身分から解放し、イワン・ポレジャーエフという町人のもとへ嫁がせることにした。その代償としてポレジャーエフのためにサランスク市の商人ギルドへの加入金を支払ってやり、身分を一格上げてやった。アグラフェーナとイワンの結婚式は1805年1月に行なわれた。やがて生まれた詩人はイワンの子というその父称と姓を母の夫から得たのである⁽²⁾。この通説に対して、詩人の誕生を1804年8月30日とする説もある⁽³⁾。これによれば、アグラフェーナは私生子アレクサンドルを連れてポレジャーエフに嫁したことになる。

1808年にイワン・ポレジャーエフが突然失踪したため、アグラフェーナはストル

イスキイ家に仕える身内のもとへ戻った。1810年にはアグラフェーナ自身もなくなり、アレクサンドルは地主屋敷の召使部屋で育てられた。

1816年の夏、すでに県庁の勤めもやめて隠退していた実父がアレクサンドルをモスクワへ連れていき、寄宿学校に入れた。4年後の1820年にアレクサンドルは試験に合格し、モスクワ大学文学科の自由聴講生になった。当時の法律によって、貴族身分に属さぬ者は正規の学生たる資格を得られなかったのである。

1823年にレオンチイがシベリアで死んだ。ある農奴をはげしく殴打したあげく撲殺してしまったのが表沙汰になり、トボールスクに流されていたのである。彼は些細なことに激しやすく深酒を好みしばしば度をすごして酒乱におよぶという病癖を息子にも与えていた。

アレクサンドルの学費はストルイスキイ家から支給されていたが、送金は不定期で、とどこおりがちであった。父方の親戚のうちアレクサンドルという伯父だけが肉親の情をもって彼に接していた。

『サーシカ』が1825年に書かれたとされるのは、この年の2月にプーシキンの『エヴゲーニイ・オネーギン』の第1章がはじめて出版されており、『サーシカ』は明らかにその影響をうけた一種のパロディーと目されるからである。ともに年若い蕩児を主人公とし、その気ままな遊興を描いているばかりではない。その歌い出しからしてもじりの跡が歴然としているのである。それぞれの冒頭の4行はこうなっている。

『エヴゲーニイ・オネーギン』

わたしの叔父はこの上なしの律義者だ。
 重い病いの床につくと、
 いやが上にも、はたの者から尊敬された。
 これにまさる分別はない⁽⁴⁾。

『サーシカ』

おれの伯父貴は怒りっぽいたちで
 ごまんと悪態をあびせるけれど
 打ち明けて言えば、ほんの少し
 おれはこの伯父貴を好いているのだ。

自分より5歳ほど年長の詩人の作品に接したボレジャーエフはおそらく深く心を動かされ、召使部屋にはじまる自分の受けた教育、伯父一家との付き合い、大学での生

活、とりわけ若さにまかせた学生仲間との放蕩無頼な暮らしを、感興のおもむくままに『サーシカ』に歌いこんだものと想像される。

詩の形式は『エヴゲーニイ・オネーギン』の各連が14行でその第1章は60連からなっているのに対し、『サーシカ』は12行が1連を形成し、第1章が38連、第2章が27連（連の数はテキストによって若干異なる）、それに短かい題辞とエピソードとからなっている。詩行は4脚の弱強格（ヤンプス）で、各連とも脚韻の構成は ababcdcdefef（うち a, c, e が女性韻, b, d, f が男性韻）という整然たる3組の交差韻から成立している。

『サーシカ』の作者は同時にジュコフスキイばりのロマンチックな抒情詩も書きはじめ、そのいくつかはカチェノフスキイが編集していた『ヨーロッパ報知』に掲載された。まもなくロシア文学愛好者協会の会員にも迎えられた。その若さにもかかわらず、早くも一人前の詩人として認められたのである。

ポレジャーエフにとって不運だったのは、彼のデビューがデカブリストの蜂起を鎮圧して即位したニコライの強権的な統治の開始と重なり合ったことである。1826年の7月に、公安を担当していた悪名高い第三部に匿名の密告があり、そこにはモスクワ大学の教育方法の紊れの実例として『サーシカ』の名が挙げられていた。

その結果『サーシカ』の作者の身に何が起こったかは、ゲルツェンの回想録『過去と思索』にくわしい。7月末の早朝3時という時刻にモスクワ大学の学長がじきじきにポレジャーエフをベッドから呼びおこしに来た。学長はポレジャーエフを文部大臣のところへ連れていき、文部大臣が彼をニコライの執務室に連行した。ニコライの手の中に『サーシカ』を書き写したノートがあった。ポレジャーエフはツァーリの面前で自分の作品を朗読させられた。聞きおわったニコライは「この墮落ぶりにケリをつけてやる。例の痕跡〔デカブリスト思想をさす——中村〕を根絶やしにするのだ」と言い、「他の者たちへの見せしめに」直接彼に軍隊に勤務することを命じた上、「おまえの運命はおまえ次第だ。わたしが忘れたら、わたしに手紙を書くがいい」と言いながら、ポレジャーエフの額に口づけをした。この情景は本人の口から10回も聞いたので間違いはない、とゲルツェンは断言している⁽⁵⁾。

宮殿への呼び出しと訊問の場での詩人とのやりとりについては異説もあるが⁽⁶⁾、大筋は変わらない。そのままポレジャーエフはモスクワ駐屯中の地方部隊に下士官として配属された。

『サーシカ』はアレクサンドル1世の治世最末期の多少ともリベラルな雰囲気の中で書かれた作品である。そのリベラルぶりのツケをニコライ1世によって払わされた

という意味で、ポレジャーエフはデカプリストの運命を分けもったとすることができる。

結局ポレジャーエフはそれ以来1838年に死ぬまでの12年間軍隊生活を余儀なくされた。1827年には無断離隊のかどで逮捕され、兵卒に降格されたばかりでなく1年あまり監禁処分を受けた。上司を侮辱して重営倉に処せられたこともある。1829年には所属するモスクワ歩兵連隊がカフカースに移動し、30年から33年にかけては詩人も現地民との実戦に参加してしばしば銃火を経験した。戦闘での果敢な行動を賞せられて下士官に戻ったのもこのときである。

33年にはタルーチン軽騎兵連隊に転属となり、モスクワ勤務を命じられたその年の冬にはゲルツェン、オガリョフ、サーチンらと知り合った。ゲルツェンはこの年の夏にモスクワ大学を卒業したばかりで、友人たちと力を合わせて雑誌を発行する計画をたてていた。ポレジャーエフは一介の下士官とはいえ、1832年には抒情詩集が1冊、32年と33年には3篇の長詩がたてつづけにいずれもモスクワのラザレフ東方語学院で印刷され、詩人の名が高まっていた。おそらく彼はゲルツェンらから有望な寄稿者として期待されていたのである。ツァーリ・ニコライとの出会いのもようを話したのもこのときである。同じ話を10回も繰返してしたというから、付き合いはかなり深かったであろう。半年後にゲルツェンとその仲間たちが逮捕されたとき、ポレジャーエフの部隊はモスクワ市内からリャザンに近いザライスクに移動していたので、詩人は連座を免れた。

ザライスクでは退職官吏ビビコフと交際し、やがてその家庭に招かれて厚遇を受け、娘のエカテリーナとのあいだに恋愛に似た感情の交流があった。ビビコフ家は第三部長官ベンケンドルフの親戚にあたり、エカテリーナの父親こそ1826年の密告者であったことをポレジャーエフは最後まで知らなかった。今度はビビコフがポレジャーエフを将校に昇進させるようベンケンドルフに手紙を書いたが、効き目はなかった。

1837年には脱走を企てて逮捕され、笞刑を受けた。やがて肺結核が悪化してモスクワの陸軍病院に收容されたが、翌年の1月16日にだれにも看取られることなく息をひきとった。死の直前に最下級の将校である准尉に昇進していた。

同時代人のポレジャーエフ観は極端に分かれていた。2,3の例だけを挙げよう。ポレジャーエフと同じペンザ県から上京してゲルツェンと同時にモスクワ大学にはいったペリンスキイはポレジャーエフからみれば同学の後輩ともいえ、その出身階層もポレジャーエフに近かったが、詩人に対する態度にはきびしいものがあった。1842年

の『祖国雑記』第5号に寄せた『ボレジャーエフ論』の中で、ペリンスキイは彼の詩人としての才能を一応是認した上で、「ボレジャーエフは運命の犠牲などではなかった。わが身の破滅について自分以外の何びとであれ責める権利は彼にはないのだ」と述べている。要するに「彼の詩はその生活と密接にむすびついていた。そしてその生活はといえば、生来のすぐれた素質が粗野で放恣な情熱に打ち負かされたいたましい典型といった趣きを呈している。この情熱が正しい志向をもった彼の才能を邪道にみちびき、然るべく発展することも成熟することも許さなかったのである⁽⁷⁾」というのがペリンスキイの判定である。どうやら彼は口にこそ出さないが、『サーシカ』のつよい印象が絶えず念頭にあったらしい。

これに反して、富裕な地主貴族であったゲルツェンやオガリョフは一時期ボレジャーエフと交友があったせい、彼に対してはるかに同情的で暖かい感情をもちつづけた。ゲルツェンは事あるごとに時代の犠牲になって身をほろぼした年長の友人をいたんでいるし⁽⁸⁾、オガリョフはロンドンで出したアンソロジー『19世紀ロシア秘密文学』の中にはじめて『サーシカ』を印刷した。この本の序文でオガリョフはこう述べている。「われわれはこれ以上悲劇的な生涯を、これ以上宿命的な最期を知らない。その生まれも育ちも、ツァーリのニコライも、みんないっしょになって、自由と詩を熱愛する若者を苦しめたのである⁽⁹⁾」。オガリョフによれば、ロシアの貴族には教養と思考力をそなえた少数派と無教養で無知な多数派とがあって、前者の代表をプーシキンとすれば、ボレジャーエフは後者の旦那層の落とし子であった。また『サーシカ』に関しては、この主人公には「大胆さはあるが優美さに欠け、自由への渴望と権力への憎悪はあるが高潔さと剛毅さはみられない⁽¹⁰⁾」と評して、プーシキンのエロティックな作品『ガヴリリアーダ』や『ツァーリ・ニキータ』などとの相違を指摘している。おそらくこれが『サーシカ』についての情理兼ねそなえた最も的確な評価といえよう。

2

1957年に『詩人文庫』叢書の1冊として刊行されたボレジャーエフの詩集では『サーシカ』のテキストについて次のような注釈がつけられている。

ロシアではじめてこの長詩がほとんど完全に印刷されたのは Д. Д. リャビーニンの書いたボレジャーエフの最初の伝記においてである（これは『ルースキイ・ア

ルヒーフ』誌の1881年2月号に掲載された)……その後1888年、1889年、1892年にそれぞれ出版されたこの詩のテキストはおびただしい脱落や誤りを含み、連の数え方に混乱がある。十分に信頼できる原テキストが存在しないという状況のもとで可能なかぎり完全な『サーシカ』のテキストが公刊されたのは1933年である……本書では検閲にそぐわぬ語や表現だけは別として最大限の完全さをもってテキストを提示する⁽¹¹⁾。

『詩人文庫』の『サーシカ』のテキストは1933年のアカデミア (Academia) 版を踏襲しており、ごくわずかな語句について変更を加えているにすぎない。上記の注釈を書いたのも二つの版の校訂者も、B. B. バラーノフである。彼はボレジャーエフの生涯に関して最も詳細な調査を行なった研究者としても知られている。

バラーノフの注釈について若干の私見を述べると、リャビーニンのボレジャーエフ伝で『サーシカ』が「ほとんど完全に印刷された」というのはかなりの誇張である。実際にはごく一部分、作者の生い立ちに関連した個所が抜き出されているだけである。「ロシアではじめて」というのは適切な限定だった。すでに述べたように、国外では20年も前に文字どおり完全なテキストが出ていたからである。筆者は19世紀末の諸版のうち1892年にマルクス出版社から刊行されたものだけを披見し得たにとどまるが、たしかに多数の伏字のほか随所に脱落がみとめられる⁽¹²⁾。最後に、「検閲にそぐわぬ」というのは「猥褻」の婉曲な表現である。少なくとも、校訂者の作成した原稿から検閲官が不適当な個所を削除したという意味ではなく、もともと校訂者が良俗をばかかって空白のままにのこしたと解すべきである。

一般に刊行物の中で公序良俗を遵奉するという態度は革命前より最近のソビエトにおいて一層著しいように思われる。ソビエト的ヴィクトリアニズムと言うべきか。

伏字の復元にあたって参照したテキストは次の2種類の版である。

1) ニコライ・オガリョフ編『19世紀ロシア秘密文学』、ロンドン、トリュブナー社、1861年。上述したようにボレジャーエフと面識のあった詩人のオガリョフが亡命先のロンドンで刊行したもの。このアンソロジーは反政府的な内容やエロティックな表現を含んでいるため本国では出版できなかったロシアの詩人の作品を集めている。ここでは PПЛ と略称する。

2) 編者不明『性愛・猥褻文集』 この表題のあとに次のような副題と注記がつく。「ロシアにおいては未刊の古代、中世、現代の著名作家の秘蔵手書き作品集。故ザヴァドフスキイ伯ならびにその他の収集家の所蔵文書より。1865年転写」 原文は

次のとおり。Еблематическо-скабрзный альманах. Собрание неизданных в России тайных хранимых рукописей знаменитейших писателей древности, средних веков и нового времени. Из бумаг покойного графа Завадовского и других собирателей. Переписано в 1865 году. この『文集』は40冊の手書きノートからなり、そのうちの21冊目がすべてこの長詩にあてられている。ただしその題名は『サーシャ』である。鳴海完造氏の旧蔵本であるが、いつ、どこで、またどのような径路で氏がこれを入手されたかは不明である。ザヴァドフスキイはエカテリーナ2世の寵臣の1人として有名で、アレクサンドル1世の治世の初期に文部大臣を勤めた人物である。『文集』のここでの省略記号はECAとする⁽¹³⁾。

なお上記の書物はいずれも当然のことながら旧正字法によって書かれているが、引用のさいには現行の正字法に改めた。

以下の校合はアカデミア版のテキストに即して行なう。ラテン数字は連の番号、アラビア数字は連の内部における行を示している。

第1章

(1) XIV, 9—12 4行伏字

РПЛ, ECAともこの部分が欠落している。しかしそれは意識的な省略ではなく、XVの最初の4行がここに繰上がっているのである。このため次につづく2連が4行ずつずれ、РПЛではXVIIが20行になる結果をまねいている。さらにРПЛのXVIIIが24行からなっており、結局第1章の連数がアカデミア版のテキストより2連少なくなっている。ECAには連の切れ目はあるが、番号はつけられていない。

(2) XV, 3 С в трактире научился

РПЛでは бл...ми, ECAでは блядьми。この語はふつうロシア人にとって語頭の1文字だけで容易に了解されるらしい。

(3) XIX, 4 Ни обе ничего

РПЛでは бл...и, ECAでは бляди。なお『詩人文庫』版では книги となっている。

(4) XXI, 7 Сидит в трактире он

РПЛでは с бл...и, ECAでは с блядьми。

(5) XXVI, 5 Толпа иль дам стыдливых

РПЛでは бл...й, ECAでは блядей

(6) XXVI, 7 Целуем смазливых.

РПЛ, ЕСАともに ,щупаем

(7) XXVII, 4 Пошел на Сретенку».

РПЛではк бл...ъ, ЕСАではк блядям!

(8) XXVII, 9 Идем ругаясь

РПЛ, ЕСАともに по матерну

(9) XXVII, 10 全行伏字

РПЛ, ЕСАともに В расстежку банты на штанах,

(10) XXVII, 12 Нам светит в сенях.

РПЛではбандерша, ЕСАではбандырша

(11) XXVIII, 1 全行伏字

РПЛ, ЕСАともに —Мне Танька, а тебе Анюта!

(12) XXVIII, 5 Приап, Приап!

РПЛではплещи м.....ми, ЕСАではплещи мудами.

(13) XXVIII, 9 О мизогины!

РПЛ, ЕСАともに онанисты,

(14) XXIX, 3—12 10行伏字

より完全な ЕСА では次のとおり。

Ебаке грязному послушна,
Она и млеет и дрожит ;
Одна нога коснулась полу,
Другая нежно на отлет,
Одна рука спустилась долу,
Другая к персям друга жмет ;
И вьется жопкою атласной,
И изгибается кольцом,
И изнывает сладострастно
В томленьи пылком и живом.

РПЛでは3行目のЕбакеがЕ...е, 9行目の жопкою が ж...ю で示され, 6行目の другая のあとにコンマがある。

(15) XXXI, 5 Вот те, которые

РПЛでは в бордели, ЕСАでは в бардели. なお『詩人文庫』版は в бордели として, 伏字にはしていない。「売春宿」を伏せないのはソビエト社会における4半世

紀間の唯一の「進歩」というべきか。

(16) XXXI, 7 Покинув постели,

この伏字は『詩人文庫』のみ。РПЛ, ЕСА, Академия版はいずれも мягкие を空白の部分に入れている。伏字の含意がわからない。

(17) XXXIV, 4 дев!

РПЛ では Нещадно у...ъ, ЕСА では Нещадно уебенных

(18) XXXVIII, 6 全行伏字

РПЛ では К е.....у, ЕСА では К ебене матери в пизду,

(19) XXXVIII, 9 Скачите припевая :

РПЛ では б...ди, ЕСА では бляди, としている。

第2章

(20) III, 7—12 6行伏字

ЕСА では次のとおり。

И долго, жопочки крутые,
На вас не стану замирать,
И нежить пламенной рукою,
И прижимать к моим устам,
И припадать, резвясь порою,
К упругим поленьким грудям!

РПЛ は7行目の жопочки に ж...и をあてている。

(21) IV, 4 Теперь пируют.....

РПЛ では у бл...й, ЕСА では у блядей.

(22) XI, 8 Но только увидал ;

РПЛ では ж...у, ЕСА では жопу.

(23) XII, 3 Народ не тот здесь, что

РПЛ では в бордели, ЕСА では в бардели. この場合も『詩人文庫』版は в бордели と明示。

(24) XV, 12 Ах ты подлец!

РПЛ では е... м..., ЕСА では , ебена мать, としている。

(25) XVI, 7 Пирует, нежится.....

РПЛ では с бл..., ЕСА では с блядьми,

(26) XVII, 3 лилейны

РПЛ では И щупать ж...чки, ЕСА では И щупать жепочки

(27) XVIII, 9 全行伏字

РПЛ では Про...ь целковишкой в бордели, ЕСА では Проеть целковишко в бордели...

(28) XXV, 9 《Сюда.....》 греющим

РПЛ では, е... м... б..., ЕСА では ,ебена мать. おそらく РПЛ の б...は余分であろう。4脚がくずれるからである。

(29) XXVI, 9 В мертвецки пьяным

РПЛ, ЕСА とともに (В)есь выпачкан, となっている。

(30) XXVI, 11—12 2行伏字

РПЛ, ЕСА とともに次のとおり。

И ртом вонючим и поганым,

Его не раз ты замарал!

ただし РПЛ では 11行目の末尾のコンマがない。

(31) XXVII, 4 Ты нежила его

РПЛ では жопкой, ЕСА では ж...となっている。後者がこの語を伏せている(頭文字から類推は容易だが)のはここだけであり、逆に前者が明示しているのもここだけ。

(32) XXVII, 5 Виват, трактиры.....

РПЛ では и бордели, ЕСА では и бардели, であり、『詩人文庫』もやはり РПЛ 同様に и бордели としている。

なお念のためにつけ加えるならば、「無検閲」のはずの РПЛ と ЕСА でともに唯一の伏字となっているのは РПЛ の XVIII, 11—12 の 2行である。それはアカデミア版の XIX, 11—12 に相当する次の詩行である。

Своим аршином б[ога] мерит

И в церковь гроша не дарит.

双方のテキストでこの 2行が点線で示されているので、単なる省略ではない。このことは РПЛ と ЕСА の『サーシカ』が同一ではないまでも同系統のテキストにさかのぼることを意味している。

注

1. Ключевский В. О. Курс русской истории. ч. 5, Сочинения. т. 5, М., 1958, стр. 177.
2. Полежаев А. И. Стихотворения. М.-Л., Academia, 1933, стр. 46. В. В. Баранов が本書でポレジャーエフの伝記を執筆している。拙稿の記述はこの伝記に負うところが非常に大きい。
3. Краткая литературная энциклопедия. т. 5, М., 1968, стр. 838. この文学小百科でのポレジャーエフの項の執筆者も上記のバラノフである。
4. 金子幸彦訳『エヴゲーニイ・オネーギン』による。ただし邦訳の原文は行分けになっていない。(『世界文学大系』26巻, 筑摩書房, 昭和37年, 5ページ)
5. Герцен А. И. Былое и думы. ч. 1, Собрание сочинений. т. 8, М., 1956, стр. 165-167. 金子幸彦訳では『過去と思索』第1部のつげたり(『世界文学大系』82巻, 筑摩書房, 昭和39年, 109-111ページ)。
6. Академия版『ポレジャーエフ詩集』(上記の注2) 74.
7. Белинский В. Г. Полное собрание сочинений. т. 6, М., 1955, стр. 127.
8. ごく1例を挙げれば, 論文《1831-1863》, Герцен А. И. указ. соч., т. 17, М., 1959, стр. 95.
9. Огарев Н. (ред.) Русская потаенная литература XIX столетия. London, Trübner & Co., 1861, стр. LXIV.
10. Там же, стр. LXII.
11. Полежаев А. И. Стихотворения и поэмы. Л., 1957, стр. 441-442. 『詩人文庫』大版シリーズの1冊。ここでは Н. Ф. Бельчиков が伝記を書いている。
12. Стихотворения А. И. Полежаева. СПб., 1892. 『サーシカ』は 283-298.
13. この『文集』には『サーシカ』以外にポレジャーエフの作品として28篇の詩が収録されている。いずれも「検閲にそぐわぬ」ものばかりで、むろんポレジャーエフの既刊の作品集には一つとして収められてはいない。バラノフによれば、確実にポレジャーエフの手になるエロティックな詩は『ジェニー』Дженни と『カリブソ』Калипсо (2篇とも未刊, 『文集』にもない) だけであり、他は根拠がないという。(Баранов В. В. Судьба литературного наследия А. И. Полежаева. 《Литературное наследство》 т. 15, М., 1934, стр. 234.) 絶えず経済的に窮迫していた詩人がとくにその晩年に投機的な本屋に作品を売りわたしていた(注11の『詩人文庫』版, 29)ということから察すれば、ポレジャーエフが手とり早く金になるポルノグラフィに手をそめたことは充分にあり得ることである。しかしこの種の作品の信憑性、とくに原作者を論証することはよほどのことがなければ困難であろう。『文集』でおびたしい数の作品がポレジャーエフに帰せられていることは、少なくとも19世紀の半ばのロシアの読書界でポレジャーエフが好色文学の大家と見なされていたことの証拠とみて差支えなからう。多分ペリンスキイにはそれが気に入らなかったのである。

(13. IV. 1985)